

驚愕の声をあげる絢の口に、頬を伝い落ちた精液が入った。女教師が初めて知る味が、舌から口内全体にひろがる。

「あああ、これが、香厨子くんの精液……」

絢は初めての精液の味を、教え子から逆に教えられたのだ。そう思うだけで、背徳の劫火ごうかによって喉から胃が焼かれた気がする。それは想像だになかった、甘美な炎だった。

順一のほうも、自分の精液で絢の顔を穢けがしたことで、イメージしたことのない満足感を得ていた。

「はあああ……」

精神的快感で筋肉が痺れて、椅子からすべり落ちてしまう。ボディシャンプーがこぼれた床に尻餅をつき、浴室の床に横たわった。

絢の乳房から離れてあらわになった勃起を目にして、翔子が高らかに笑った。閉めきった浴室にエコーが跳ねまわる。

「なんだ。皮をかぶったままで二度も出したのか。敏感なオチン×ンだな」

「それは絢先生の巨乳が気持ちよすぎるから……」

「聞き捨てならないな。それではわたしの胸が、絢より劣るみたいじゃないか。今ま

でに何人の男子生徒が、わたしの胸で果てていったと思うんだ」

「わたくしのお胸も忘れてもらっては、困るのですわ」

寝そべったままの順一のペニス^が、翔子と藤枝の手で同時につかまれた。二回連続の射精で、萎^なえてはいないが敏感さを増していた亀頭の包皮が、一気に剥きさらされてしまう。

「あひついいいっ！」

衝撃で、順一の腰が高々と弾けた。前後に揺れるピンクの亀頭を、左右から四つの日焼け爆乳と美白豊乳が挟みこんだ。

「うわっ、わわわ」

一度に二人からパイズリをされるとは、想像もしなかった。

いや、それだけでは終わらない。

「絢も加われ。あつちに乗って、主人などと自惚^{うぬほ}れているガキに、四天王のすごさを思い知らせてやれ」

翔子が目配せする方向へ、絢がうなずいて移動する。教え子の命令にも逆らえないが、それ以上におねえさんの言葉は絶対だ。

順一は近づいてくる担任教師に質問した。

「絢先生、なにをするんですか、うっ！」

床に横になったままダブルパイズリを受けている順一の顔を、絢がまたいだ。あの日の放課後のごとく、順一の顔に担任教師の股間が乗った。今回はパンティなど存在しない。濡れた女性器そのものが、少年の口をふさいだ。

「むんっ！ んぬんんん！」

驚く順一の口のなかに、昼に知った女教師の味がひろがった。どんなスパイスよりも鮮烈で、どんなソースよりも芳醇^{ほうじゆん}な、至上の美味が、少年料理人の鋭敏な味覚を陶醉させる。鼻腔にも、気管にも、そして肺にも、女の媚香がたつぷりと充満した。

「うん、うふんん……」

うつとりとする順一の上で、絢が身体を前へ倒した。英語教師もまた魅乳を、浴室のなかでただひとつのペニスに押しつける。

「くっんんんっ！」

合計六つの乳房が、今日初めて女の温かさを知った十五歳の勃起を囲んで、押し合いへし合いを演じている。順一の視界は絢の豊満な尻にふさがれているので、自分の下半身が置かれた境遇は見えない。ただひたすら気持ちいい。次々と微妙に異なる触感の乳肉や乳首に刺激されている。



（たまらない。気持ちよくて、たまらないよ。ああっ、もう）

「うんんんっ!!」

順一の腰がガクガクと震えた。六つの乳房の渦の中心から、白い粘液が間欠泉のようにあがり、顔を向かい合わせる三人の美教師の顔を同時に穢した。

「あははは。出た出た」

「今回も大漁ですわ」

「香厨子くん、またこんなに……」

翔子が舌を伸ばして、絢の鼻先についた精液を舐め取った。

藤枝も翔子の頬に唇をつけて、粘液をすすりあげる。

二人の淫らな行為にいざなわれて、絢も藤枝の唇にキスをする。かわいい音をたてて、おねえさんの口のまわりから教え子の排出液を奪い取った。

三人の女教師は互いに濃厚な口づけをくりかえしながら、生徒から新たな射精を搾りださせるために、トリプルパイズリを続行させた。

「うんんっ、んっ、あふうう……」

順一は次の絶頂へ向けて、ペニスから流れこんでくる巨乳まみれの快感に全身を浸しつづけた。